
魔法戦記リリカルなのはF o r c e ~ 世戦の軌跡 ~

岸辺 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはForce（世戦の軌跡）

【Nコード】

N2087X

【作者名】

岸辺 翔

【あらすじ】

平和の為に自らに関わる全ての記憶を封印した死神と、戦争を根絶するために戦火を生み出す狼と、過去の事故によって人生を歪まされてしまった少年と、己を救ってくれた思い人を助けるが為に戦う少女たち4人が描く、美しくも残酷な戦いの記録。「君はなんのために戦う?」「お前に命を奪う覚悟はあるか」「どうして、貴方たちは……!?」「大丈夫、私もいるから……」
今再び、戦乱の刻が動き出す

プロローグ Allie Started

「風が……人の心が、荒れてる……。なにか良くないことが起きそうだね……」

「なんだ、また予言か？」

「予想だよ。でも、当たりそうで嫌だなあ……」

時空管理局・局長室。

そこで2人の男が話し合っていた。

「……で、今回の予言は？」

「……狼と、風と、閃光と、死神と、魔王と、牙と、兎と、夜天と、猛毒と……。なんだか、嫌な予感しかないね」

「死神はお前だとして、狼や牙、ましてや猛毒……？」

「まあ、僕はみんなを守るだけだから。やることなんて変わらないよ」

漆黒を思わせる長髪をなびかせながら、男は小さくため息をついた。まるで鬱陶しそうに、それでも満足そうに。

「今のうちに策を考えよう。新造次元航行艦の準備を急ごうか」

「了解だ。お前も戦うのか？」

「必要とあらばいつでもね」

「お前らしいな」

暗い室内で残響した、2人の声だけが怪しく残った。

十 十 十 十 十 十 十 十

「……………新たな戦火……………か」

暗い、闇の底。

明かりなど何処にも無く、ただただ闇だけが続く空間。

これは……………俺が刻限を向かえ、世界から排除され、また次の世界へ行くときへの繋ぎ空間。

また、俺は借り出されるのか。世界へと。

「様々な世界を見てきたが、次はどうなることやら……」

新たな戦い。

それが何を意味するのか。

そして、それこそが過去と現在と未来の交わる未知の世界。

死神と言われし少年と、銃騎士と呼ばれし狼と、猛毒と呼ばれた
人の少年少女の物語

ブログ All started (後書き)

どうもこんばんは、岸辺です。

今回は予告無く投稿させていただきました。

この前投票を行いました、あれは悪く言えば隠れ蓑、よく言えば本気です。

というわけで、銃騎士シリーズを今後ともお願いいたします！
では！

狼・第1章 懐かしの世界

「閣下、不可解な救助要請が来ています」

「……見せる」

次元の海に存在しているOHN本社の総統室。
そこで俺は部下から一枚の紙を受け取った。

「次元座標100-CDA2G-203KS……？ 詳細は来ていないのか」

「現在受信中です。至急伝達させますか？」

「……いや、俺が出向こう。自分で確認する」

椅子から立ち上がり、無駄にデカイ机を避けてドアまで歩く。
この部屋の設計は俺がやったわけではないので、何故か『閣下に相応しい部屋にしよう！』とかそういうノリで、クソデカイ部屋と机になったわけだ。
マジでふざけんな。

「では、人払いを？」

「……ああ、頼む。それから双転移ポートの起動を頼む」

「ハッ」

「……………しかし、次元座標が100番台……………？　あまり認知されていない座標だが　」

<　助けテ！>

「　　ッ……………！？」

激痛と共に、何者かの声が俺の頭の中で響いた。

その痛みはこれまでの経験で語れぬほどのもので、体に力を入れることも適わず膝を付いてしまう。

これは……………なんだというのだ。銃弾も、重力も、大気も、熱も……………このような痛みを生み出さない。頭の中身全てをミキサーでかき混ぜられ、強力な電気を流されたような……………鋭くも鈍い痛み。俺でなければショック死だろうな……………。

「閣下！？　一体何が！！」

「まて……………話しかけるな……………」

<苦しい……………痛い、ヨ……………！>

「ぐアッ……………！　つく……………」

「えい、衛生兵！　衛生「黙れ！」あつ、も、申し訳ありません…

……………」

「…………ハア…………ハツ…………。汝に問う、お前は…………何処にいる」

<もういやだ……………誰も、傷つけたくない……………！>

「ああ…………そうだな。その悲しみから逃れただろう。だから教える…………お前は、どこに……………！？」

<来ちゃダメ……………みんな、死んじゃう……………>

「……………悲しい思いを続けてきたのか……………？ その連鎖を食い止めるのはお前自身だ……………俺はその手伝いしかできん……………。おい！ 逆探知が完了した！ 今すぐ双転移ポートの駆動を切れ！俺が直接飛ぶ！」

「ハッ！」

伝達兵が双転移ポートを遠隔停止させたのを確認し、体を駆け巡る魔力を胸の一転に集中させる。

頭痛が止まないが、それでも逆探知だけはできた。この声が次元間通信を利用した精神感応だったのが幸いしたな。

次元座標は先ほどの報告にあった場所だ。それほど苦労もしないはずだが……………。

ッ！？

「銀十字！？」

【……………エクリプスEC因子の反応を感知。強制転移を開始】

突然俺の目の前に現れた、一冊の魔導書。

EC因子の感染源でもあり、俺の第二のパートナーだ。

「待て！ 俺には任務が……」

【精神感応お発信地点と報告。 …… 決定権を譲渡】

「なッ……… わかった。 転移しろ」

【双転移発動。 転移時の肉体保護としてデイバイダーの起動を提案】

「……… 承知だ」

【認証完了。 デイバイダー起動と同時に転移開始】

左手にDESERT EAGLE 14inchを模したEC兵器デイバイダー
が現れると同時に、俺の体を部分的に機械質の鎧が包んだ。

左腕両足に展開されるこの鎧。 銀十字いわく、これは『俺にもっとも適応した姿』らしい。 よくからん。

同時に俺を浮遊感が襲い、目の前の景色を一変させた。

「……… 弾薬は充分、武装も難点は無い……。 しかし、ここは」

ここはどこだ？

大気に混ざっている原始成分からして、ここが鉱山であるのはわかるが……。

あの半壊した遺跡に様なものも気になる。

「銀十字、ここはどこだ」

【転移先。ルヴェラ鉱山遺跡と断定。救難信号のあった地点から半径200メートル圏内であり、かつその4時間前へ時差転移を完了】

「時差転移までやったのか……。まあそれは構わんが、信号発信地ポイントから200メートル圏内……？ ……って、あれしかないか」

誰がどう見ても怪しさ満天の鉱山遺跡。

俺が到着したのはその上にある崖……だな、畜生。銀十字め、厄介な場所を選んで転移しやがったな？

「……Ja・野宿でもするか」

【近辺に食用可能生命体の反応なし】

「……お前、何処までひねくれている？」

【現状通りには】

「……そうか。正常そうで何よりだ」

片腕だけでなんとか岩を登り、視界を拡大表示に切り替えてあたりを見回す。

夜だからか明かりが目立つな。おかげで暗視ナイトを使わずに済む。

「小さな町に……草原と……山脈。さしずめ自然保護区域か」

【光景から第23管理世界ルヴェラ文化保護区と算出。正式照合の可否判断を譲渡】

「曖昧で構わん。それよりも全周警戒をしろ」

【受諾ROG】

パラパラと銀十字からいくつかのページが飛び出し、あたりに散らばっていく。

これらは索敵レーダーのようなもので、最高で約100億ものページを散布できる。しかも攻防兼用。

連ねれば刃にもなるし、集約すれば盾にもなる。まさに攻防一体の武器なわけだが

「……性格がこれだからな」

【なにか？】

「いいや……気にするな」

【……索敵範囲を半径3キロに拡張。危険分子なし】

「3キロで……やりすぎだ。1キロ圏内でネズミー匹のこらず報告しろ」

【索敵範囲縮小。動体を複数確認。総数3。内一体は無機物と判定】

「無機物で動体……まるでデバイスだな」

【ワイジョン視覚変更。ズーム・ワイジョン拡大表示からスケルテイ・ワイジョン透過視覚へ】

「お、おい、勝手に変更を……って、クソ……」

勝手に変更された視覚で確認してみると、すぐにその姿を見ることができた。

15、6歳くらいのがきと、その隣で浮遊するちっこい無機物。その反対側には何処からかやってきたであろうネズミ。

……まあ、確かにネズミー匹残らずと言ったが……。しかもがきの方はまっすぐに俺の方へ来ているし。危険分子反応は無いから平気だと思っが……。念には念を、だな。銀十字には隠れてもらうか。

「フリース動くな。両手を肩まで挙げて膝をつけ」

特殊な歩法と魔力運用で瞬間的に音速を超え、がきの後ろからDESERTEAGLE 14inchを突きつける。その間に視覚の通常に戻し、ハンマーも起こした。

「…………あの、俺…………なにか？」

「今のところはなにも。しかし今後どうなるかはわからん。まずはここにいる理由を訊こう」

「長期旅行での観光です」

「証拠は」

「パスポートと、今までの写真くらいなら……………」

「親権適用者は誰だ」

「保護者なら、います」

「名は。IDはわかるか」

「管理局の人で、名前は……………」

「……………管理局、だと……………？」

「待て。管理局とは、よもや時空管理局か」

「え、ええ、まあ」

「……………そうか、続ける」

「えっと、スバル・ナカジマ。特別救助隊です」

シルバー・レスキュー

「ッ……………！……………そうか。あいつの……………」

……………しかし、なぜあいつの名が出てくる？

俺はもう、フェイトやなのはたちが生きている『あの世界』に変えることはできないはずだが……………。

「……………すまん。尋問のようなことをして。楽にしてくれ」

「軍人ですか？ そんな質量兵器あぶないものを持つてゐるってことは、それなりの違法企業だと思っんです」

「法は法にあらず。一応管理局からの許可は得ている」

「管理局が質量兵器を許可……………？」

「細かいことは気にするな。この時間にここへ来たということはお前もあれが目当てか？」

「……………はい。さっきも言ったとおり、観光目的で」

「ならこの時間からいくのは避けたほうがいい」

そう言ってDESERT EAGLE 14inchを右脇のホルスターに収め、魔力で作った小さな炎を明かりにする。

野宿でも共にどうだ？ と誘ってみると、ガキは素直に頷いた。

「名を聞いていなかったな。俺のコードネームは銀狼^{シルバークウルフ}。お前は

「トーマ、トーマ・アヴェニール。15歳です」

「で、そっちのデバイスは」

「どうも、ステイードと申します」

「非戦闘用デバイス……か。しかも特注」

「はい、スウちゃんがくれたもので」

……しかし、今は新暦何年だ？

それがわからねば今後の行動も変わってくる。

「時にトーマ、J・S事件を知っているか？」

「それって6年前の大規模犯罪ですよね」

「ああ。あれは酷いものだった……。まあそれはいい」

そうか、6年前か。

ということとは、なのはやフェイトは26歳という事になるな。
むウ……そろそろ抜かれるぞ、俺。

「食料の確保はできているのか」

「はい。銀狼さんのほうは？」

「問題ない。元々1週間くらいの断食ならば耐えられる」

「うへえ……想像もできない」

「しなくていい。それよりも……設営や寝具はあるのだろうか」

「まあ、自分の分くらいは……」

「俺の心配はするな。砂漠だろうが沼地だろうが、俺は何処にでも適応しうるようになってる。傭兵を甘く見るなよ」

「傭兵？ 傭兵って言ったら犯罪じゃ」

「ふむ……そうだな、正式名称で言つと『防衛用装備を持った個人オペレーター』だ。よって軍属ではない」
「プライベート」

「い、言い回しの屁理屈ですよね……それ」

「法律なんぞそれでいい。穴の無い鉄壁など存在しないのだからな」

そのような他愛の無い雑談をしながらも、着々と準備を進めていく俺とトーマ。

コーヒーを出された時は流石に礼を言わざるを得なかったがな。

そろそろ4時間経つかと思つたそのとき、再びあの声が聞こえた。

内容は先ほどと同じものだが、痛みはそれほどでもない。
…ただ、トーマにも聞こえているようで、痛みを苦しんでいた。
…

「その痛みを受け入れるとは言わん。慣れる」

「まさか、貴方にも……!?!」

「ああ。しかし、この程度ならば問題ない」

トクン……

心臓の鼓動と同期して、右目が急にうずいた。

俺の右目は視力を失っている。しかし、その代わり以上の能力を得ている。

その1つが エクリプス EC因子コアの核だ。これは非常に厄介なものだが、俺の仕事上役に立っているのも確か。

EC因子は俺に力を貸し、俺は体を貸す。そうしてやってきたが…
…まあ、時折不便もある。
色々と、な。

「……………行くのか」

「……………助けてって、言ってます」

「……………そうか。なら、俺も力を貸そう」

声が出たので遺跡を見れば、そこにはコルト M16と重装甲

を装備した兵士が数人巡回していた。

それに白衣を着た研究者らしき人物が複数と、装甲車両に物資搬送員が数名。

……戦力はたいしたことないな。

「お前はそこにいろ。一撃で全員気絶させる」

「でも、人数が」

「これでも隻腕で戦ってきた経験はある。1キロ圏内のこの距離で外すわけが無かるう」

右袖に左手を突っ込み、中からベネリ M3 スーパー90を抜いて構える。

同時にレアスキルであるトリガー・ハッピー 魔力を弾丸として形成する能力 を発動させ、無数のTASER XREP弾を形成した。

TASER XREPというのは、まあ簡単に言うと射出型のスタンガンだな。性格にはその弾丸だが。

俺が今構えているM3も、弾丸は12ゲージのTASER XREP弾だ。本来射程は50メートルほどなのだが……まあ、そこは俺の技術で云々。

「作戦許容時間は3分。できるか」

「……がんばります」

「了解。^{コピ} 目標補足……^{ロックン・ターゲット} 発射ッ^{ファイア}」

合図と共にトーマが走り出し、その後ろから幾多ものTASER XREP弾が発射されていく。その全ては警備員や研究者たちの首筋を捕らえ、確実に気絶させていった。

つと、俺も後を追わねばな。俺がここに来たのは元々悲鳴を主を助けるのが目的だ。

M3のスリングを肩に掛け、崖を一蹴りで飛び降りる。すぐにトーマに追いつき、中にいた研究員や武装警備員を全てTASER XREP弾で気絶させていく。
なんだ、えらく薄い軽微だな。見た目は重要そうだったが……。

「……この研究……もしや……」

「知ってるんですか……?」

「見覚えがある。この肉塊、それにこの気配……よもやECでは」

「E……C?」

「大分ヤバい方向ということだ。お前はあまり首を突っ込まないほうがいいかもしれん。ここから先に進むと、二度と後戻りはできんぞ……」

幾重もの電子ロックで保護された巨大な扉を前に、俺はM3を構えなおした。

この先から超えの気配がするが、陽動の場合もある。警戒するに越

したことは無い。

「……………でも、助けてって……………言ってます」

「……………そうだな。なら、突入いくしかないなッ！」

厚さ30センチ程度の扉を蹴破り、瞬時に進入してM3を構える。
敵影無し、民間人無し、生命体反応1　クリア！

「要救助者1名を発見。トーマ、俺が見張りをしている間に救出ヤープできるか」

「は、はいっ」

フォアエンドを壁に引っ掛けてコッキングし、左腕1本で構える。
見張り兼護衛という立場上部屋から出ることはできない。できうる
のであれば通路に出たいが……………そうもいかん。
後ろではトーマの短い悲鳴も聞こえるし、なにより……………あいつは、
自ら？こちらの世界？に来たのだ。俺がとやかかくいう筋合いは無い。

「トーマ！　まだか！」

「その、手錠が中々外れなくて……………」

「チッ……………。どけ、撃ち壊す！」

M3を壁に立てかけ、右脇のホルスターからDESERT EAGLE 14inchを抜き、貼り付け台に拘束されていた女の手錠と足枷を撃ち壊す。

早くしてくれ、そろそろ3分が経過するぞ……！

『警告、警告。感染災害の危険発生』

「奴らに感づかれた！ 救出はまだか！」

「あ　大丈夫です！」

「早く脱出を　クソッ！」

バシンッ！

扉が重厚な魔力障壁に変わり、さらには天井からスプリンクラーのような突起が出てきた。

こいつア……まさか……

『これより熱焼却処理を開始します。近隣ブロックの職員は至急非難を』

「やはりか……！　トーマ！　魔法は使えるか！」

「一応、基本的なものは！」

「なら全力でシールドを張れッ。念のためこいつも使え」

そう言っただけで着ていたロングコートを投げ渡し、被っているように伝える。

俺の軍服は耐弾・耐熱、耐刃の特殊繊維できている。多少の熱なら緩和してくれるだろう。

仕方ない……エクリプスEC因子、使うか。

『カウント6』

「よもやこれに頼らねばならんとはな……」

『5 4』

「トーマ、準備はいいか」

「はいッ」

『3』

「はア……ECデバイダー、スタートアップ！」

【E - C Divider Code - 000 - Start Up】

俺の左腕と両足を機械的な鎧が被い、さらにくるぶしまである長いロングコートが現れた。

なにやら鎖帷子くさりかたびらのように鱗状になっているし……何故急に装備が変

わった？

『2 1』

「っ！」

＜エンジンゲージ
誓約＞

『0』

「なんだ、今の波動は！」

大量のガスと火炎が舞い散る中、俺は『俺が良く知る反応』を感知していた。

部屋にあった設備は全て溶けているが、無論俺に傷は無い。しかし、今の反応はまさか！

「……………ッ……………！やはりか……………！」

急いで振り返ったそこには、予想通りの変化を遂げていたトーマがいた……………。部分的な黒い装甲に、色が変わった瞳。こいつも世界に選ばれてしまったか……………。

クソッ。ディバイダーまで起動していやがる。

< E - C D i v i d e r C o d e - 0 0 0 . S t a r t U p >

「 トーマ！ ディバイダー そいつを止める！」

「 デイバイド ゼロ……」

突如天井に向かって放たれた巨大エネルギー砲撃。

威力は不完全とはいえ、それでも施設を貫通してしまう威力だ。このまま制御不能状態にしておくのは厄介だな。あまり手荒なことはしたくないが……。

「 ツ！」

瞬時にリボルバー型のデイバイダーを蹴り落とし、女を引き離してトーマを床へ押さえつける。

そのまま後ろ手にOHN特性の手錠をかけ、DESERT EAGLE 14inchの銃口を頭に突きつけた。

「 声が聞こえれば返事をしろ！ もし意識が無いようであればこの場でお前を殺す！」

こいつはECエクリプス因子に感染した。それは見ればわかる。だからといってはいそうですかと見過ごすわけにもいかない。少なくとも敵味方をはっきりさせ、今後の処置を伝えねば……。。

「　　っ…………！？　あ…………れ…………。俺、なにを…………！」

「聞こえるか、返事をしろ」

「え…………あ、はい！」

意識が覚醒した瞬間、デイバイダーと鎧は消え去った。

どうやら無我で発動していたようだな…………。危険極まりない話だ。

「この場で詳しい話はやめておこう。用件は1つ、お前は今どれだけ？危険な立場？にいるかわかってるか」

「危険な立場…………ですか？」

「…………その様子では、なんら理解していないようだな。まあいい。早くこの場から逃げるぞ。奴らが来る」

「あっはい…！」

トーマが女を背負い、俺が証拠を消しながら撤退する。

ふむ、そこそこの魔力量はあるみたいだな。そうでなければ女を背負って全力疾走など、そうそうできるものではない。

俺のように基礎を鍛えていれば関係ないが…………それでもガタがくる。しばらく走り続け、山の2合目辺りで小休止を取ることに。

「トーマ、こいつに名を訊いてくれ。お前がEC因子エクリプスに感染したのを見る限り、シュトロゼック・シリーズであることは間違い無いだろうが……」

「えと……俺はトーマ・アヴェニール。君は？」

<リリイ・シュトロゼック>

「リリイ……うん、可愛い名前だ」

「……妖精イリュイ……か。また嫌味な名を付けられたものだな……」

「あの、銀狼さん。これからは……」

「なに、宛はある。しかしお前の面は割れてしまっているから、表立った行動はさけることになるだろうて」

「なっ、なんでですか!？」

「先刻、熱焼却処理システムが発動したろう。あれが発動したということは俺たちがあそこにいたのを視認されて、そして確認をしたということだ。まあ俺はいかような媒体にも姿が映らないから問題ないがな」

「……じゃあ、もしかして……手配されてるんじゃない」

「そう考えるのが妥当だろう」

そう言いつつ、当然のようにトーマは考え出してしまった。

いくら長期旅行とはいえ、裏の世界に首を突っ込んでしまったのだ。後戻りはできないし、今後は世界や組織の連中に狙われることとなる。

俺が傍にいる間はさせんが。

「安心しろ。隠密行動は得意だ。たとえ手配書を回されたとしても逃げられる自信はある」

「……………俺、管理局に信頼できる人がいるんです。その人に言えば、きつと保護してくれ「甘ったれるな」んなつ……………」

「俺たちは今、管理局の認識で？殺害を認められている？のだ。理由はいくつかあるが、俺たちが『EC因子』エクリプスの感染者であるということが大きい」

そう言つて右目の眼帯をずらし、蒼の瞳に紅い文様の描かれた右目をトーマに見せる。

EC因子特有の片翼模様。本来は体のいたるところに現れるものだが、俺の場合は進化の過程で右目のみ収束してしまった。おかげで摩訶不思議な能力もあるがな。

「EC因子エクリプスつて、なんですかっ」

「……………詳しくは後に明かそう。今は逃げ延びることと、俺から離れないことだけを考える」

「でも、銀狼さんが敵にならないって保障は……………」

「……………そうだな。だが俺はお前を敵にする気は無い。同じ病にかかったものとして……………なにより、シユトロゼックそいつを持つ者として」

シユトロゼック・シリーズ。

それはEC因子エクリプスの為に生み出された、人型生命体管制制御ユニット

ドライバーだ。ハイアマノイド・バイオ・セルフテイ

ドライバー感染者と融合・同調することによって火器制御装置となる媒体を操作するのが主機能メインなのだ……………。

銀十字の書が何冊あるのかなど知らんし、少なくとも先ほどトーマも出現させていた。つまり現時点で2冊あるということになる。

……………まあ、詳しいことは後々考えるか。ダルくなってきた。

「これ以上留まるのは危険だ。町まで出るぞ」

「……………はいっ」

「あの、銀狼殿？」

すすすゝ、と寄ってきた非戦闘デバイスのステイードが、俺に耳打ちをしてきた。

なんだ、主人に聞かれたくないような話なのか？

「なんだ」

「もしか、OHNのでは……………？」

ッ……
さすが、デバイスだな。
情報のリンクが早い。

「……………俺の素性は伏せておこう。今度のためにも、今の関係を定着させるためにもな」

俺はステイードをトーマに投げ渡し、山道を歩き始めた。

OHNの総帥、銀狼。

今の俺はその立場でここにいないのではない。

俺は今、エクリプスEC因子に感染した者としてトーマの隣にいる。

同じ病に感染した同胞として、更なる悪夢を生まぬようにセーフティ安全装置として、呪われた銃騎士として。

俺は、キルゾーン世界を殺す猛毒となることも厭わんと決めたのだ

牙・第1章 忌まわしき過去

「なのは、例のブツがでたらしい」

「……そう。出ちゃったんだ、あれ」

「……………ああ。シグナムからかねがね噂は聞いていたが……
ついに表に出た」

「……………隼人さんと同じ病気」

「エクリプス E C 因子が　　な……………」

重く押し掛かる重圧。

エクリプス E C 因子……………それは世界を殺しうる猛毒とか言われる病気の一瞬な
んだけどな……………。

こいつがまたタチの悪い奴で、感染者を人あらざるものにしちまう。
俺の戦友……………つつーか、昔から一緒に戦ってた奴もこいつが発祥し
てな、そりゃもう大変だった。

元々手が付けられない上に異常になったせいで、世界どころか次元
を消しちまうかとも思ったほどだ。

そのせいで俺たち管理局でも体制を強化し、感染者は殺害が許可さ
れちまった。ひでえもんだ。

「俺あ情報収集に言ってくる。新しい出現予測地点が割り出せたと
か言ってたし」

「気をつけてね、ゆうくん。あの人たちに魔法は通じないし……」

「心配すんなよ。俺たちには 三銃士にやあ、隼人あいつが残してくれた高濃度魔力圧縮弾HMBがある。ECエクリプス因子相手だろうと問題ない」

「……うん、そうだよ。隼人さんが残してくれたんだし、大丈夫だよね」

「……そういや……あいつが消えてから、もう6年か」

「……どう、してるかな」

「さあ。俺は銃騎士じゃないからわからないが、きっとどこかで元気にやってるんじゃないのか？」

あいつの事を思い出して暗い顔になってしまったのはを抱きしめ、ゆっくりと頭を撫でる。

本来俺たち三銃士は消える運命にあった。だが隼人が無茶をすることによって三銃士は生き長らえ、今こうして幸せを掴むことができる。

感謝しても仕切れないが、あいつ自身が望んだことでもあり、そうするしかなかった。

いつだって
あいつのやってきたことはいつだって正しかったが、いつだって間違っていた。けど最期のあのときだけは……俺には他の答えがわからなかった。

コードネーム・銀狼シルバールフ、本名を隼人という。あいつが銃騎士であり、俺がその三銃士だったことを光栄に思ってる。

それだけ仲が良く、掛け替えの無い存在だった……。

「……………行ってくる。緊急回線だけは空けといてくれよ」

「うん……………行ってらっしゃい、ゆうくん」

小さな笑みと共に玄関を出て行き、ガレージに停めてあるバイクに跨る。

日本のメーカーで販売されていたVFR-1200F。ミッドチルダじゃあ車検に通らないのでエンジンをガソリンから魔力駆動に変更しちゃいるが、その独特の音や性能はそのままだ。

向かう先は報告にあった地点。EC因子エクリプスが出現したと考えられている場所だ。

ここから先は管理局からの命令じゃない。俺の独断と、あいつの……意思だ。今もなお一部の奴らによって受け継がれていく、あいつの。

「……………頼むぜ、今日も」

「構いません。それよりも……………不確定な電波が」

「登録なしか?」

「はい。ただ、ログに該当が」

「発信者および受信者を割り出せ」

俺の第二の愛器、ライジングソウルからの情報を聞きながら指示を出す。

不確定電波だった？ ふざけんな。この緊急事態によお……。

「発信者不明。受信者複数。広域電波だと思われます」

「内容は」

「？我、狼なり。墓守たちよ今こそ目覚め、世の断りを我が天秤に？……だそうですが」

「狼に墓守か……。墓守はたぶんOHNのことだな。天国の外側にいる者たち……でもなあ」

OHNの奴らに命令を出す奴。

今のところその権限があるのはリインフォースのみだ。だが狼と名乗ったりはしない。せいぜい闇だ。

となると、考えられるのは1人しかいないんだが……そいつはもういない。消えた。いてはならない。

消えたからこそ今の世界があるし、消えなかったらこの世界は無い。だからこそ俺が生きてるし、この世界に存在している。

「それと新たな報告書が」

「……内容は」

「^{エクリプス}EC因子と思われる反応が2つ、このことで」

「なっ、2つだと!?!?」

さっきの報告にあったのは、EC因子エクリプスと思われる痕跡が1種類あったという報告。

今の報告が本当なら、今現在EC因子エクリプス1つが同時に行動していることになる。とんでもないことだぞ。

1つでさえ苦戦するつてのによ……。

「……犯人はわからねえのか」

「犯行現場に残されていた証拠は2つです。1つは顔、姿の全てが写された映像。2つ目は犯人が使用したであろうTASER XR EP弾です」

「TASER XREP? あれはIDが残るはずだろ?」

「いえ……それが、何故が残っていないらしく」

「あの弾からIDシートを除去できる人間……? いるのか? そんなん」

あの弾は発射時にIDシートを吐き出す仕様だ。

それを解除できる奴はそうそういないし、銃弾職人であっても難しいといわれてるほどだ。

「まあ、無駄口叩いても仕方ない……。ライジングソウル、次の予想到達地点は」

「ええとですね……………なっ、ここですー!」

「はぁッ!?!」

驚きのあまり急ブレーキ。

危ねえ。ここが山岳地帯じゃなくて市街地だったら事故ってるぞ。つてか、予測値地点がこっつてどっついうことだ？

「到達予想時間まで残り2秒! 1…………ゼロ!」

「いくらなんでも急すぎや」

ズドンッ!

地響きすら軽がると超える轟音を響かせながら、山の斜面を削り取るような衝撃。

事実、俺の目の前にクレーターが出来上がっていた。ひでえな。砂埃が舞っているの、その中心にいる人物の特定はできない。特長さえつかめれば……………!

『……………やあ、君はこの世界の住人だね?』

「誰だ! 両手を挙げて武器を出せ!」

『それはできないな。僕はまだやることがあるし、なにより彼を助けていない』

徐々に晴れていく砂埃。

腰までであると思われる黒髪に、感情を思わせない雰囲気。

なんだ、こいつは……。気配がまるで読めないし、まるで死にたての死体だ。

「何者だ！」

『……今は、死神とだけ名乗っておくよ。それより君も行くんだろ
う？ 彼の下へ』

「なに……？」

『彼は今も逃亡を続けている。君の足ハイクでも追いつけるかどうか……。
まあ、僕は行かせてもらおうね』

「あ、おい待て！」

舞っていた砂埃を一瞬にして消し飛ばし、その男も消えていた。
空を見上げてみれば、そこには黒い翼をはばたかせる何か。まさか
……あれが今の男だということのか？

「マスター、次の予測地点が」

「……ああ。わかった。あいつのことは報告書にまとめておいてくれ」

「御意。では案内します」

今のあいつはいったいなんだったのか。

管理局のデータベースにでも問い合わせれば。あるいは、無限書庫にでもいけば乗っているかもしれないが……それはやめよう。

今の気配は敵意ではなかったし、どちらかというところ虚無だった。下手に干渉して敵となられても困るしな。

「敵とも見方ともわからない外部勢力……か。怖いもんだな」

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

「こちら和輝！ 至急応援求む！」

『増援は向かわせた！ 持つか！？』

「かなりきついつての！」

閃光と、無数の魔力光。

俺たちは魔法を、あいつは銃弾を。
どうやっても拮抗してしまう状況だが、こっちは7人、むこうは1人だ。

数の差では圧倒的に有利なハズなんだが……。

「エクリップス E C 因子が相手じゃ、なあ………」

エクリップス E C 因子。

俺たちの魔法を全て無効化し、尚且つ絶対的な肉体を手に入れるクソ厄介な病気。

その発症者が相手だ。顔を仮面で隠し、ロングコートのせいで体つきもわからない。

正直、厄介すぎてダルくなってきやがった……。

「HMBの数にも限りがあるし、なにより無駄遣いはできねえ。なにより威力が高すぎるし、銃が持たなくなりそうだし………」

俺の戦友 エクリップス 隼人が残してくれた、E C 因子に立ち向かうための唯一の方法。

魔力を結合させるのではなく、魔力そのものを高濃度状態で圧縮して弾丸状に形成した銃弾。エクリップス E C 因子でも消されること無く、AMF環境下でもその威力は絶対。

けどあまりに威力が高すぎて、銃がもたないんだよな……。

「はあ……あいつがいてくれりゃあ………」

消えてしまったあいつ。

んこんな状況ですら一瞬で打開してしまいそうな、それだけの力を持ったあいつ。

……………今頃悔やんでも、戻ってくるわけ無いけどな。

『……………手^ぬ抜いな』

「ハッ。そりやすまねえな」

『これでも貴様らは世界の駒か……………？』

「ざけんじゃねえよ。こちとらユニゾンもしてねえんだぜ？」

『融合……………か。無駄なことを』

膝まであるんじゃないかと思うくらい長い銀髪を揺らしながら、男が歩いてきた。

魔法は一切効いてない。それにむこうは構えてすらいないが、俺は関係なしにナイフとPDW FN P90を構えた。

攻撃を仕掛けてくるような気配は無い。むしろ完全に警戒を解いているような……………温和な雰囲気だ。

「……………こっ、これ以上来るな！ 発砲を余儀なくするぞ！」

『……………器の小さき者だ』

いつのまにかEC因子エクリプスの有効範囲内に入ってしまったのか、俺の飛行魔法が解除されて重力に引かれた。

と思ったら、俺は胸倉を掴まれて宙に浮いてやがる。

クソッ！　なんだこいつ。敵意はねえのに体が震えるぞ……！？

『どうした、怖気づいたか』

「……ヘッ。ざけんじゃねえよ」

『フン……その意気や良し。だが貴様は告人とはなれない』

「なに言ってるんだテメエ。さっさと離せよ」

『………我は真判者。我が名は狼。全ての頂点に君臨し、森羅万象を駆け巡る者。貴様も告人となりたくば……世界に轟かせることだ』

瞬きと同時に男は消え、俺の飛行魔法は回復していた。

ドツと吹き出る汗を拭いながらも、なんとかナイフをしまっ。

気持ち悪いくらいの威圧感に、ありえないくらいの安堵感。

怖いとか恐ろしいとか、そういうレベルの話じゃあねえな。

「………全部隊へ通達。ターゲット・ロスト目標喪失。偵察部隊は編隊を組んでできうる限り追跡。ほかは全部……俺のところに来い」

……俺は、ロクに反抗もできなかった。
かつてEC因子^{エクリップス}を発動させていた隼人と対峙した遊騎みてえに、俺は真正面から戦うことができなかった。

……あいつは強くなつたな。隼人が消えてから急に守るもんが増えちまつて、それを守りきれるように頑張つて、今の力を手に入れた。飛鳥さんだつてそうだ。

隼人がいなくなつたぶん、まわりの奴らを気遣つてばかりで……。結局、俺はなにもしちやいなかった。何も、……。できちやいなかった。

「……リック、遊騎に繋いでくれ」

「どつしたん、急にしょげて」

「ちいとばかり……課題が増えたぜ、俺ら」

「せやな。きばつていこう」

EC因子^{エクリップス}に対抗する手段は3つ。

- 1つ。魔法を一切使わず、肉体のみで戦う。
- 2つ。特殊な方法、および武器で生成される限定戦闘を行う。
- 3つ。OHNで生産されている特殊魔力弾HMBを使用する。

現在、これ以外に方法は無い。

……いや、あと1つだけ……。ある。
同じくEC因子^{エクリップス}の患者となることだ。

まさこれはリスクが高すぎて誰もやらないし、やれないんだがな。

「さあ俺たちは作戦会議だ！ 遊騎がきたら巻き込んでやるぞちくしょう！」

対EC因子戦闘メンバー

- ・空牙遊騎
- ・有栖飛鳥

上記2名

+++++

EC因子襲撃事件。

その通報は私のところに来ていた。それもわざわざ緊急で、だ。最近多発しているEC因子事件を緊急で送るとは何事かと思っ
てみれば、それは和輝からの報告だった。
私と共に戦い続け、銃騎士である彼に仕えていた戦友 大和和輝からの……。

和輝からの連絡は信用できる。いつだって完璧な仔細を教えてください

ていたし、この報告書だってそうだ。
でも、問題は……。

「この写真……どう見てもあの子よねえ……」

長い銀髪、高い身長。この2つの文章と、戦闘中に撮ったであろう
本人の写真。

私はこの子をよく知っているし、和輝もこの子を知っているはず。
そういう存在だ。

「飛鳥さん、ちょおいしいです?」

「……あら、はやてちゃん。いいわよ」

「おおきに。単刀直入に訊きますが、あの人がこの世界にいる……
ゆうん確率は?」

「無に等しい天文学的數字ね。自分で言っていたけれど、一度消滅
しているのだし……」

「………死んだ人間は蘇らない。16年前の事件で、それは立証
された……」

「それにあの子がこの世界に返ってくる………返ってこようとす確
率も低いわ。元々人に対して執着心の薄い子だったし、自分から満
足して消えたんだもの」

私は、あの子が消えた瞬間にいなかった。
でもフェイトちゃんたちによれば、自分の境遇に納得し、受け入れ、
そして消えたといっていた。

一度世界に『消滅』を認定された人は蘇ることもできなければ、ほ
かの世界から『混入』することもできない。それが長年管理局が研
究を続けてきた成果だ。

もしもこの写真があの子なら、その現実すらも覆す大事件になりか
ねないわね……。

「まあ、この件については私が調べておくわ。はやてちゃんには上
と掛け合ってもらってもいいかしら？」

「中間管理職は慣れてます。どうぞ」

「ありがとね。それじゃ私は勝手にやらせてもらうわ。……できれ
ば、戦力はそろえておいてね」

「ええ、わかってます。私たちもこのままじゃ……戦えませんか」

そう言うてはやてちゃんは立ち去り、長い廊下に私一人が残された。
冷酷な女、そういう風に言われることは多々あるが、私とて大切に
思っていた家族がこうして現れかねないことを危惧していないわけ
ではない。

あの子とは一緒に遊びもした、暮らしもした。だからわかる。

「……………この写真は……………あの子に間違いない……………！！」

膝まである長い銀髪。何者の干渉も許しえない気高き狼。

銀狼　いえ、隼人。

貴方はまた、私の前に敵として阻むの……？　貴方はまた、彼女たちと戦おうとしているの……！？

貴方が愛し、守ろうとした彼女たちを……また……！

「そんなのって……あんまりよ……！」

愛する人と戦わなくてはならない苦痛を、私は知っている。

愛する人を傷つけなければならぬ痛みを、私は知っている。

それは、何事にも例えがたい雲雀で、胸をえぐってくる。

とてつもない……痛みなのよ。

＋＋＋＋＋

今日未明、一通の報告書が私の下に届いた。

差出人は飛鳥さんだ。

内容はとても衝撃的で、つい確認の無線を出してしまったほど。

「OHN総帥が、この次元に……！」

全次元最大の民間軍事会社『OHN』

管理局から質量兵器の所持・使用を許可され、尚且つ管理局ですらその手を借りている超大型組織。

もし管理局とOHNが総力戦を行えば、それは10日で終わってしまうほど。無論、管理局の敗北は決まっている。

けれど、本当に恐ろしいのはOHNの兵士ではない。その総帥だ。もしもOHNの全兵士と総帥が戦えば、1ヶ月で決着がつく。勝利するのは総帥……私の兄だ。

実質的戦力は測ることができない。そういわれ続け、どのような組織にも屈しない最強の軍隊。

それが、OHN。

「どうして……どうしてこの世界に来たの……？ 6年も待って、やっとあきらめられたのに……！ お兄ちゃん……！！」

私の兄は6年前に消失した。

いや、消滅したといってもいい。

これまでずっと心残りだったというのに、やって諦めがつきそうだったのに……。

もう、この気持ちを前にじっとはしてられない。

「なのにも伝えないと。もし本当なら、終わらない戦争になりかねないっ」

報告が本当ならば、お兄ちゃんは管理局に喧嘩を売ったことになる。
私も、戦わざるをえないから。

対E.Cエクリプス因子戦闘メンバー

- ・空牙遊騎
- ・有栖飛鳥
- ・フェイト・T・ハラオウン

上記3名

牙・第1章 忌まわしき過去（後書き）

あとがき

作者 「お久しぶりです。はい、すいません」

フェイト 「……………で、ネタバレは？」

作者 「しないって。どうせ暴走するでしょ」

遊騎 「可能性はありだな」

和輝 「やつと俺出てきたのね」

飛鳥 「出番短いけどね。まあ内容も短くて薄っぺらかったけど」

作者 「るせえ。時間無かつたんだよ」

フェ・遊・和・飛 「へーえ……………」

作者 「うぐつ……………。し、しかたないじゃん！ ここ最近忙しかつたんだよ！？ パイプ組んだりレンチが足りなかつたり！」

フェ 「……………土木作業の人なの？」

作者 「いや、一応物書きだけど……………」

遊騎 「なのにパイプ……………か。どうせパソコンラックとかそのへんだろ？」

作者 「いや、2メートルくらいの鉄パイプ」

飛鳥 「……………わけがわからないわね」

作者 「と、とりあえず……………本編の補足、いい？」

和輝 「勝手にしろい」

作者 「あいさ。えー、サブタイトルの冒頭に『狼』とか『牙』とかついてるでしょ？」

フェ 「あ、確かに」

作者 「あれはそれぞれの主観を表したもので、『狼』ならOHN、『牙』なら管理局、といった具合ですね」

遊騎 「無駄なことを……………」

和輝 「馬鹿だな」

作者 「るさい！」

飛鳥 「……とりあえず、収集がつかないから感想返しに行くわよ」

感想返し

空牙刹那 様

作者 「安心してくださいー。今回の主役は『銀狼』ではありませんん！」

銀狼 「なっ……なんだと……？」

作者 「いたのかよ！」

銀狼 「あ、ああ……まあな」

作者 「……とりあえず、今作の主人公は存在しません」

銀狼 「……ほう？」

作者 「しかし、メインとなるのはいます」

銀狼 「で？」

作者 「メインとなるのは『OHN』・『時空管理局』・『謎の影』の3つです。今回個人での主役はいません。組織同士の争いを通じ、原作主人公の变革を主にしていきます」

銀狼 「ほう……今までに無い主観だな」

作者 「んー……まあ。面倒だけど」

銀狼 「駄目作者め。まあいい。俺がここにいる理由だが、個人の存在は決して1つではない。無数にいるのさ」

作者 「うわ、適当な理由つけやがった！」

次回予告

人と人との思いの中。全知全能と言われ、それを拒んだ死神。心を
知り、それを受け入れ、全てを死へと誘う魔の魂。

影・第1章 介入

影・第1章 死神と云われし影

「人の悪意と敵意の入り乱れた世界……嫌な場所だ。こんなにも混沌としているとはね……」

僕はさつき、この世界の住人であろう人に出会った。

確かに登場のしかたは怪しかったかもしれないが、まさか殺気を向けられるとは思わなんだ。

この世界の人は少し野蛮なのかな……？

「まあ……僕を知っている人はいなさそうだし、多少本気になっても問題ないかな。ここには彼もいることだし」

僕がこの世界に来た理由は一つ。彼を助けるためだ。

エクリップス EC 因子に魅入られてしまった彼を……。

それにはこの世界の情報が欲しかったんだけど、もうそこらじゅうで報道されてるね。EC因子発症者を発見 エクリップス って。

あれは厄介なウイルスだ。僕でさえ完全抹消が出来ない。まあ作ったのは僕の友人なんだけどさ。

「さあ、行こうか。早く彼と この世界を安定させなきゃ」

黒い一對の翼を出し、僕は森林から飛び出た。

僕は死神。それは比喩表現ではなく、実際にそうだ。

死を届けるからではない。僕は死後の世界　　いわゆる『あの世』
で生まれて名を馳せてはいたけれど……まあ色々あつてね。今のと
ころ、僕はただの敵になるのかな？誰を基準かは知らないけれど。
もう一度翼を羽ばたかせ、魔法を組み合わせて瞬時に別世界へ移動
する。あの気配は探しやすい。死にたての死体みたいな、全く意欲
が無くて生気が微かに感じられるあの気配。
言い換えれば、僕が殺した人たちの気配と同じ感覚だ……。

「やあ、久しぶりだね。君と会うのは26年ぶりかな？」

「……………貴様は……………」

「覚えてるかな？…………いや、覚えていないだろうね。君と会った
のはほんの数秒だ」

「…………失せる。今は誰とも…………会いたくない」

「そもいかない。僕は君を止めなくちゃ」

「……………そう……………か」

【敵性生命体確認。排除行動を実行】

「なっ　　ッ！？……………これはこれは……………不思議なものだね……………

！」

突如現れた魔導書。

それが鼓動をなしたかと思うと、僕の内臓がことごとく荒らされて

いた。

相手の体内を操作する魔法……？ そんなもの聞いたことが無い。
……ってというか、僕じゃなかったら死にかねないよ……。

「……無傷、か」

「お生憎様。こっちは頑丈なものでね」

「こいつの排除行動を凌ぐとは……貴様、人間か？」

「いや残念、死神だ」

「……神、自らを神と云うか。言い得て妙だな」

細くて真っ黒いバイザーと、それにつながった顎まである仮面（のつもりか？）を付けた男。この人こそ、僕が探していた人なんだけど……。

なんだか、嫌な感じだ。

僕を見ているのに見ていないような、見ようとしていないような……。

【甲の抹殺を提案】

「提案を考慮。……全力での戦いを所望しよう」

「……いいよ。やってあげる。君が死んでも責任は取れないけどね」

男は魔導書を投げ捨てると、男は空に舞い上がった。
ロングコートの右袖がそのせいで揺れていたけど……今の揺れ方、
なにかおかしい。まるで関節の無いまっすぐなものが入っているよ
うな、不自然な袖の揺れ方だった。
いつまでも下から眺めているわけにはいかないので、翼を羽ばたか
せて空へ追いかける。

「……行くぞ」

「ああ。第1門、完全開放」

刹那。

1秒よりも短い時間で、僕を黒いマントが包み込んだ。
武器は人斬り鎌デスサイズ。武具は髑髏の仮面。故に死神。
……というより、これそのものが僕の姿なんだけど。

「奇怪な姿だな」

「まア……ネ。だからッて手加減八しないヨ」

「そうしろ」

男が左手で空を切ると、鋭い風斬り音と共にマントの端が切れてい
た。

見えない剣ツルギ……？ 嫌だね。幻想の宝剣イマジンブレードを見るのはこれで2度目だ。

「アあ、良い剣ダね」

「……そう思うか……？」

「少なくとも、僕の死人デスサイズの怨念と斬りアえるんじゃない？」

「……そう、だな。その切れ味、触れることなく感じるさ」

「なら始めようじゃないか」

ガアンツ！

低く轟く金属音。決して激しくぶつかり合ったわけじゃない。ただお互いの斬激がぶつかっただけのこと。

ほんの少し……数センチ刃先を動かして生まれた斬激同士が、ね。

「防いだか」

「遊ビカイ？」

「……いや、小手調べのつもりだったが……よもや遊戯と間違えられるとはな」

「ハハツ。君らしいネ。でも手加減はデキナイ！！」

長い柄を利用して鎌を高速回転させ、刃先の速度を音速から光速へ

向かわせる。

どれほど早い物質も、どれほど硬い硬質も、この鎌の前では無意味。全てを切り離すこの鎌ならば、見えぬものでも存在せぬものでも、全てを刈り取ることができる。

けれど、やはりそう簡単に隙は見せてくれないね……。

「エクリプス E C 因子ノ方は抑えられているの力な？」

「そこそこだ。奴の意識が6割程度……自我が負けている」

「凄いネ。常人なら死んでいるのに」

「俺は人ならざるものだからな。この程度はどうということないが……」

「謙遜しなくていい。実際に凄いんだから」

「……そうか。なら、この攻撃は予測できるか？」

彼が左腕を振った瞬間、斬撃ではなく銃弾が僕の体を貫いた。

おや……？ おやおや？ なんてかな？ しかも後ろから……。

「これも君の攻撃かい……？」

「……知らん。俺はまだなにも……」

「……邪魔が入りソうだ。これデ失礼するよ」

「またの機会に戦おう」

「あア」

一瞬でその場を離れ、先ほど銃弾が飛んできた位置を地面から計算する。

角度的にはこの先だけど、はたして犯人はいるのやら……？

「いてくれると、説教ノ１つでもできるんだけど……」

別段、僕は怒っちゃいない。でも戦ってる最中に横入りされるのはたまらなく嫌いだ。
それだけわかってほしい。

『命中は確認……その後の追跡は不可能』

『だな。次の現れる可能性も高いし……閣下をスネーク観察するぞ』

『ジャンジャン同意。任務続行……』

……… たまらなく怪しい人たちがいた。

10メートルほど先に、若そうな男女2人組み。歳は17………くらいかな？

それにしても物騒だなあ。1人はアサルトライフルを改造した狙撃

銃まで持つてるし、もう一人は多機能型の双眼鏡とサブウェポン多数……。

怖いねえ、全く。

しかもギリースーツ半脱ぎと見慣れない軍服かあ。

『ターゲット対象に動き無し………』

『全周囲警戒に移る』

『了解』

「おわつト………」

ライフルを構えた男がこちらを向いたので急いで木に隠れ、デスサイズを消して様子を伺う。

ただでさえデスサイズはでかいし、今は骸骨がマントを被ってるよ
うな格好だ。怪しさ200%超えだろっ。

見つかったら射殺されかねないよこれ………！

『？ ……今、声がしなかったか？』

『した。5時の方向………1人』

『見てくる』

「………終わつたね、こりゃ」

『まただ。いるんだろ、出て来い』

ありゃ、完全に見つかってるね。

諦めて木陰から出て、両腕を上げて敵意が無いことをアピールする。

「……………やあやあ、こんニちは。決して不審者じゃないよ？ 本当だヨ？」

『いや、不審者感丸出しなんだが……………』

「……………本当……………だヨ？」

『……………』

「……………」

『……………』

『……………拘束』

「……………」

女の子が小さく呟くと同時に男は銃を投げ捨て、ナイフ片手に走ってきた。

怖いって畜生！ なんで僕の言葉を信じてくれないのかなぁ！？

「ちよつ、やめ口つて!」

「んなッ!?!」

ナイフを避けて腕を掴み、体ごと地面に叩きつける。

おー怖い怖い。刺さったら痛いよあれ。

いやまあ、すぐ治るけど。

「は、速え」

「いや、遅いでしょ……。時速20キロ無かったヨ?」

「流石閣下とやり合うだけのことは……」

「……………嗚呼、やっぱり見てたんだ。さっき撃たれたしねえ」

マントの下から背中に手を回し、防具用の外骨格で止まっていた弾を投げ渡す。

この装備は人の骨格標本みたいなもので、まあ見た目は骸骨だ。一応僕が入ってるわけだけど、特殊な偏光で見えなくなってる。

骸骨人形の完成さつ!(orz)

「これ、返すよ。僕はいらないし、必要も無いから」

「……………弾あ食らって平然と返した奴、お前が初めてなんだが……………」

「H A H A H A。人生色々あるさ。……さて、とりあえず僕はね？
これヲ撃った君たちをちよーっと説教したイんだ。結構痛かつ
タんだよ？」

なんかこう……トスッ！ と来る感じでさ。

「ト、いうワケで……Are you Ready?」

「え……ちょ、まっ」

「なんで私まで」

「レッツ、説教タイム！」

……。

その後、説教は4時間続いた。

+++++

「……さて、これで僕の痛みヲ理解してくれたかな？」

「はい………すみませんでした」

「……………誤る」

「うん、素直なの八良い事だヨ。でもどうして……………増援がいるのかな？」

説教も終わり、ひと段落着いたところで僕の右肩のあたりで何かが爆ぜた。

反応炸裂弾かな？ まあ、死神姿の僕に何をしようが、普通の攻撃は何一つ効かないけどね。

「無駄ダよ。僕に銃八効かない。君たちならそれ以外の方法もアるんじゃないかな？」

『……………先刻、閣下と戦闘を繰り広げていたようにお見受けするが』

「アあ、そうダね。今じゃ彼は閣下だ。そして審判者であり……………僕は死神だ」

『……………下がれ、チーム・ホース』

「……………了解」

僕を撃った2人が1歩さがり、武器をしまった。

おいおい……………完全に警戒解いちゃってるよ……………。いいのか？ 僕がいるのに。

「私の部下がとんだ失礼をした。詫びをしたい」

「……おや、随分と……芸達者な隊長さんだ」

全身に包帯を巻きつけ、その上から迷彩服を来た面白い人。
右目しか出ていないのも面白いけれど、何より拳銃ばかり何丁も持
っているのが面白い……。

「私の名は村雨。見ての通り手負いだが、こいつらよりは有能だと
思っほしい」

「みたidane。警戒ノ仕方がまるで違う」

「……気配探知、かね？」

「少し違うかな。僕からしてみれば、君たちの『気』自体が可視性
なんだ」

「人の『気』を見る……？ 不可思議なものだ」

「だね。人にとってはソうだ。……僕はそろそろ帰りたいんだけど、
イイかな？」

「………すまないが、そもいかないな」

動きこそ無いが、その気配は確実に僕を射抜いていた。
おお怖い怖い。殺気が凄いね。これじゃ……逃げられそうも無い。
まあ、さっきの彼ほどではないけども。

「……見逃しては、くれナイ？」

「……言葉は無用と申し上げよう」

「……そう。少し、悲しいよ」

こうして敵意を向けられ、戦いが避けられない以上……やるしかない。

僕は元々、あまり戦いが好きじゃない。できれば誰も傷つけず、平和的に解決したいと思ってる。

それが故に手にした力だ。………というより、それが故に与えられた生、かな。

「君ノ、名ハ？」

「ムラサメ村雨・オ・センライ閃雷。OHN総帥より頂しこの名に懸けて、誇り在る戦いを所望する」

「……僕ハ、死神。死を恐れル人に絶望を、死を崇める者に断絶を、光亡キ人に闇を送ル……先導者ダ」

「先導者、か。良き響きだが……邪悪な念を感じる」

「そうだね。僕八悪だ。デモ……闇ノ中にも光があることを教えてあげよう」

僕はデスサイズを構え、閃雷は腰を落として両腕を構えた。
なんだ……？ 徒手格闘でデスサイズを防げると思っているのか……？ 無駄だ、デスサイズは素手で防げるほど鈍らじゃない。

「……本気かい？」

「ああ」

「……そう。なら、手抜きはしないよッ」

デスサイズの柄を持ち変え、ゆっくりと……徐々にスピードを上げて回転させていく。

刃先は徐々に速度を上げ、終には 音速をも超える。

断続的に発せられるソニックブームとヴェイパーコーンを弾けさせ、僕は右手だけでデスサイズを回転させ続けた。

「……寄らば斬る、ということか」

「違うよ。寄らずとも斬る！」

ジュアッ！

鈍い、金属同士が響く轟音。それと共に高速回転していた刃は唸り

をやめ、閃雷に向かつて一直線に飛翔した。簡単な話、柄が細かく分裂し内蔵されたワイヤーで長さを調節できるようになっている。ちなみにデスサイズは鎌ではない。多形態融合武器という新カテゴリー。剣・鞭・槍・鎌・斧の5つに変化する、万事に対応すべく僕が開発した宝具だ。

効果としてはまだ明かせないが、死神らしいということだけは言っておくよ。

「無駄だ」

「ナツ!?!」

眼前まで迫っていたはずの刀身は急に角度を変え、閃雷の横を素通りしてしまった。

……ありえない動きだ。まるで光の角度が変わるみたいに……。

「……………そうか。君、光の屈折を操っているね？」

「今の一撃で見破ったか。流石は閣下とやりあうだけの腕は在る」

「わかりやすいんだよ。弾かれたのなら柄も曲がるはずなのに、君の近くに行った瞬間そこだけが曲がっていた。これは光の屈折と考えるのが妥当じゃないかな？」

「……………流石だ。もう子供だましは通じないな。正々堂々、正面からお相手しよう」

閃雷がファイティングポーズをとると、腕の周りに風の流れができていた。
なんらかの魔法か……それとも、特殊な波動か。なににせよ警戒すべきであることに変わりはないんだよなあ。
嫌だね。こんな自然の法則を無視されたものを見せられたら……殺さなくちゃいけないじゃないか。

「……………ごめんよ。でも、さようならだ」

「参る！」

「デスサイズ 死を運ぶ闇・ヘルタイパー 根源の刹那……………」

小さく、僕だけにしか聞こえないように呟く。

同時にデスサイズは姿を消し、螺旋状の衝撃波だけが閃雷に向かって駆け出した。音速を超え、人の反応を許さぬ速度へと。

だから……………これで、終わ
パアンッ！

……………り、だ？

「……………すまん。こいつらを殺させるわけにはいかな
い」

見えない剣。

さっきまで戦っていた彼が、そこにいた。

「……………ソウ。今のあれを、防いだんだ……………？」

「……………ああ」

「凄イね。ウン、凄イヨ。ナラ、これで消えてくれルかな」

デスサイズなき右手を空に掲げ、再び小さく呟く。
クラウディオ・クラウディア
全てが無に帰る刻

影・第1章 死神と云われし影（後書き）

作者 「……………えー、更新がどれだけ放置されていたか、忘れま
した。一応書こう書こうとはしていたのですが、中々すすまず……………」

遊騎 「死んで来い」

作者 「うぐっ……………。返す言葉も無い」

和輝 「それよか、なんでこんな遅れたんだ？」

作者 「……………いや、ちよつとね。不幸が続いてなんやかんやで
さ」

遊騎 「いや書けよ」

飛鳥 「そうね」

作者 「……………はい、すみません……………。えー、今後も更新は続け
ていきます。この小説の更新を待っていてくれる人もいると信
じて！ ね！」

和輝 「いるのか？」

作者 「言わないで!？」

和輝 「いないよな」

作者 「……………はい。次回の予告を簡単に。えー次回は狼編へ戻りま
す。3視点から描かれるこの本編ですが、非常に難しいです。時間
軸がバラバラですしね」

飛鳥 「読めるように描きなさい？」

作者 「はい。では次回、また会いましょうぞ」

狼・第2章 チルドレン

【汝、なにを望むや？】

「……………」

【汝、なにを求める？】

「……………」

【汝、世界の意思は？】

「……………」

【……………汝、その意味とは？】

「……………俺は……………」

【汝、その存在は？】

「……………俺は、未来へ走る人類の足元を照らす……………篝火だ」
かがりび

【それは、こんな？】

真つ暗闇の世界から、一瞬にして1本の道が現れた。
どこまでも直線を描く、人が2人通れるかどうかギリギリの道だ。

【……汝、その道を示せよ】

「……………なに……………？ 意味が ……ッ……………！」

道の先に現れた、アサルトライフルを構えた男。俺は瞬時に左太股に付けられたレッグホルスターから単発式スナイプハンドガン、タンフォリオ ラプターを抜き、男の顔を撃ち射抜いた。
なんだ……唐突な殺気で殺してしまったが……。

【汝、示せよ】

「なッ……………意図は知らんが、悪趣味だな……………！」

突然崩落し始めた1本道。俺の後ろから徐々に崩壊を始めていた。仕方なしに俺はラプターをホルスターに戻し、順々に早くなる崩落に合わせて走り始めた。

【汝、害成す者をどうす？】

「消し去るのみだ」

次々と暗闇から銃器を持った男たちが現れ、俺に向かって発砲してきた。

俺も即座に応戦し、DESERT EAGLE 14inchによる50AE弾を放つ。3人、4人、7人……………！

リロードをしているような暇は無いのでDESERT EAGLE
14inchを投げ捨て、後ろ腰のヒップホルスターからマテバ
(Model)6 Sei Unica ウニカ グリフォンを抜いて撃ち続ける。
殺しても、殺しても……！ 延々と出てくる男たちの頭
を撃ち続け、5発全てを撃つと同時にグリフォンすらも投げ捨てる。
右袖からベネリ M3 スーパー90を抜き、12ゲージのスラッ
グ弾で頭を撃ち抜く。

【汝、メビウスに嵌りても？】

「終わり無きメビウスの輪……。それもいい、それが世界の意思な
らばッ」

M3すらも弾がつき、残った武装はワイヤーアンカーとナイフのみ。
ワイヤーアンカーは左手首に装着しているのでいいとして……仕方
あるまい。瞬時にサバイバルナイフ 俺がかつてレジスタンス
時代から使っていた特殊ナイフ を抜き、手首から射出したワ
イヤーを男たちに引っ掛け、リールが巻き取る力で移動しながら首
を切り落とす。
ワイヤーで高速移動しながらの斬撃は少々難易度が高いが、俺にと
ってそれほど難しいことではない。俺の尊敬する武人はワイヤーア
ンカーを使って無限の機動をし、無限の戦法を編み出していた。

【汝、なにを望むや？】

「人類の正しき繁栄だ」

【汝、なにを求める？】

「表裏のある平和だ」

【汝、世界の意思は？】

「意思など知るものか。俺は因果の波動に合わせる」

【汝、その意味とは？】

「真理因果エフエクターの保持者。此方こなたと彼方かなたを交える唯一の道だッ」

男の首を斬り飛ばし、再び走る。

ナイフを腕の様に使い、ワイヤーワイッパを鞭刃ワイッパのように使う。

細く、研ぎ澄まされた瞬速の鉄線ワイヤーは一迅の刃となり、かの者たちの血肉を貪り食う。

閃光の刃は瞬きの上をゆき、光速　　その更なる高みへと。

「故に問う。自うぬは何故問う？」

【審判者故に、真判をせねばならない】

「真判とはいかに？」

【真実の判決。故に真判】

「何を判決する？」

【世界のあり方を】

「それは因果か？」

【因果故に無きもの】

因果律があるからこそ真判があり、真判があるからこそ因果律がある。

こいつはそう言っていた。

それは世界のありかたさえも決めてしまい、この世の全てを覆しかねない判決。

こいつは、それすらも握っているというのか？

【問う。我が名を叫べ】

「汝の名は」

【我が名は闇、そして光。そして世界を殺す猛毒】

「……エクリプスEC因子、か？」

【叫べ】

「何故」

【我が名は真判の名】

「故に何故」

【因果律の同調を図らば我が名を避けることはやすし】

「……………」

いつのまにか道は消え、足元のみ残っていた。俺に敵意を向けている輩もいない。

俺は自然と立ち止まり、ナイフをしまっていた。

「因果の猛毒よ、俺は問う。汝在るが故に世界は歪むのか」

足元の道すらも消え、全面のフラッシュアウトと同時に景色は一変した。

鉄筋コンクリートの一戸建て。どこにでもある、普通の住宅地のようにも見える……………。

「……………ここは……………」

【少年が戦いを初めし場所】

「……………戦い？」

【死戦】

「……………禍々しい、ものだ」

【可^ヤ。歴史に名を刻みし戦い】

「……………なに……………？」

もしや……………。

ふと気がついて辺りを見回すと、そこには見慣れた家があった。なんの変哲も無い家。しかし、庭へ続くカーテンは閉じられ、明かりすらついていない。……………だが、人の気を感じる。

「まさか……………そのまさかだというのかッ！！」

最悪の過去を思い出してみれば、唐突に聞き慣れた音が響いた。

ガウンッ……………！

「クソがアッ！」

急いで走り出し、ベランダのガラスを蹴破って中に押し入る。

そこにいるのは振り返り血まみれになった少年と……………永遠の眠りについた、1組の親子。

両親に抱かれて眼を瞑るその姿は、安らかそうでもあり……………なによりも悲しそうだった。

俺は少年の下に駆け寄り、その手に持っていた巨大拳銃ハンドキャノンを奪い取った。

「貴様……やはりか」

「誰だ、あんた」

「俺は「あんたもこいつの仲間か」それは違う。だが、お前の味方でもない」

「ならなんでここに……！」

「理屈などどうでもいい」

「あんたはレジスタンスの仲間か！？ それとも国軍の奴なのか！」

一瞬のうちにM92Fサブアームに持ち替え、俺に銃口を向けてきたガキ。
ああ、こいつはやはり……俺か。過去の俺だ、こいつは。

77

「落ち着け。俺は国軍でも反乱軍でもない」

「嘘だツ！ いつだって国軍のスパイはそう言いながら近づいてきた。お前も同じ腐った人間に決まってる！」

「……ツ……。ああそうだ、俺は腐ったクソ野郎さ。いつだって戦いに身を投じているな。だからこそ戦いの愚かさをわかっているつもりだ」

ガキの銃を払い除け、俺は……静かに家を出てハンドキャノンを捨てた。

すでにそこに住宅街は無く、爆撃でもされたかのように荒れ果てた荒野が広がっていた。

……ああ、そうだな。ここはもう、存在しない町だ。復興すらされないほどに、破壊されてしまった……。

「……酷いものだな。俺が死んだあと、こつも汚れていようとは……」

泥と瓦礫、死体と鮮血。

どうにもならない事実だけが、重く押し掛かれた。

これが……現実なのか。

こんなものが、現実なのか。

醜いものだ。

酷いものだ。

こんな世界……存在価値を見出せるものか……！

どうしてこつも、人間は争いたがるのだ……！？

「争いから生まれるものは少ない。少ないが人の力となる。だが……代償はあまりにも大きいぞ……」

人は戦争によって文明を進化させてきた。

電子レンジは無線の電波を応用し、インターネットは戦争時の情報伝達用に、薬学は化学兵器で……。

その裏で死んでいった者たちは、はたして報われるのだろうか？

表で活躍した軍化学者は功労者と呼ばれ、やがて殺戮者と罵られる。

……そうだ。俺も、その1人だ。

救世主として語り継がれ、破壊者として呼び捨てられ、1人の傭兵として残り続け、残影として消え逝く者。

俺は、今まで敵を征圧することが正義だと信じていた。だが、相手からしてみれば、俺の行為は全て悪だ。

この世に本当の正義など無いし、真なる悪も無ければ、公平などという現実も無い。1方からすればそれは悪で、もう1方からすればそれは正義で、まら違う方から見ればそれはどちらも悪で、正義になる。この世は不確定で留まり無く、それでいて確定した事実がある。

嗚呼、この世界は不思議だ。因果とは不定着だ。確率は予測不能だ。一体……なんなのだろう。

【世界の声】

再び聞こえた声。

無機質で、無感情で、抑揚の無い声。

「……世界の？」

【人の意思】

「……人の」

【因果の揺れ】

「因果だと？」

【世とは人と、世界と、因果で成り立っている。だが汝はなにで成り立っている？】

「……………俺は、俺の意思と、因果と、世界だ」

【そ^ヤうだ。だが今の汝には世と因果が無い。ただの力を振るう者だ】

「……………そうか」

【それでなお、汝は何を望む？】

……………。

俺が、望むものが。

無論、それは平和だ。争いの無い、血の流れぬ慈しみの平和。心と意思のみが入り乱れ、力の暴力の無い世界。

……………しかし、そこに個々の意思はあるのか……………？

統率された世界、そう言ってしまうえば簡単だ。だがそれは個人の自由は無く、完全に管理された機械だ。人間とは 世にはばかる生命とは、個々の意思と自由を持ち、その心によって動くことができねば……………！

「平和……………いや、和平……………？ ……………俺が望むのは、平和では無いのかも知れないな。何か他の……………」

【悩め、真判者よ。その先に汝の答えを示しとき、必ずや因果は声を返す。汝が道を違えしとき、因果が真を返しとき、我は再び汝の前に現れよう】

「……待て。俺はお前に訊きたいことがある。何故お前は俺を導かんとする」

【因果の意思。我は、人であり人ではなく、世でもなく因果でもない。我は 我だ】

そう言い残した声は消え、気配は消失した。

何も感じる事ができず、ただただ虚無だけが立ち込めていた。いつしかそれは恐怖すら感じられる虚空となり……自然と警戒を始めていた。

意識を張り巡らせ、針のように鋭くするにつれ 景色は急激に変わった。

荒れ果てた町から緑溢れる森の中へ……。俺は森の上空に飛んでいて、ふもとでは見覚えのある男女と骸骨野郎が対峙している。おいおい、あれは俺の……。

なにやら不穏な空気と殺気を感じたので瞬時に空を蹴り、包帯を顔に巻いた男の前に立ち虚無イマジンプレートの刀を構えた。 パアンツ！

空気の裂ける音と圧縮された物質が弾ける音。音の正体はいまいちわからんが……俺の刀と野郎の飛ばした『何か』が相殺したときの音か。

「……すまん。こいつらを殺させるわけにはいかな
い」

「……ソウ。今のアレを、防いだんだ……？」

「……ああ」

「凄いね。ウン、凄いヨ。なら、これで消えてくれるかな」

そう言つて野郎は右手を天に掲げ、何かを呟いたようにも見えた。瞬時に膨大な魔力と気力が渦をあげ、超高压縮され刹那の内に発射された。標的は俺。狙いは脳天ド真ん中。

速度はおおよそ亜光速か光速程度。非常に鋭く言い攻撃だ。だが

「エウロ・イエ虚空の叫び」

柄だけの刀で見えない『何か』を防ぎながら眩き、俺はその『何か』を消滅させた。

特になにをしたということではない。ただ単純にその空間そのものを切り取って消したただけだ。

そう、ただそれだけ。

「……考工たくもナイよ。僕が今使える術ノ中で最高レベルの技なのに、難なく対処しちゃうなんてネ」

「難なく、と言われると語弊がある。これはかなりの難度で、それなりに精神力も使うのでな」

「それデも恐ろしいのサ。僕は紛いなりにも神で、それなりに精神力も注いだんだ。それを精神力ごときデ消されちゃうとなると……。正直、恐怖ト好奇心が沸いてきた」

「ならば、その力を己の身で確かめると良い。」

アフロ・イエ
「天空の叫び」

ドッ
！

見えない『何か』が柄から飛び出て野郎に突き刺さり、再び消滅した。

どうやら、お互いにこの攻撃は利かないらしいな。

俺も魔力を付与したというのに。

「まさか……君も全てが無に帰る刻が使えるとはねエ……」

「再び語弊だ。俺はこれを解放したのみで、発動はしていない」

「そう。でも怖いものは怖いんだ。君と違っテね」

「……俺は俺だ。俺は因果によって動き、己が心で考える。そしてお前はこいつらを傷つけ、俺に牙をむいた。それすなわち 万死に値するッ」

無き刀身を野郎に向け、小さく……困むように切っ先で円を描く。虚無へと屠る範囲を指定し、その空間を 切り取る。ただそれだけで……野郎は消え、沈黙が続いた。

「………すまない。このような終焉を望みはしないが、いたしかたなかった。閃雷！ 早急に武装解除と部隊員を招集しろ！」

「は………はいッ！ 了解！」

後ろにいた男に指示を飛ばし、ゆっくりと柄を袖の中に収めた。
先刻使用した『叫びの理』^{イ・エ・メ・ア・ス}は空間そのものを捻じ曲げてしまう術ではあるが……まあそれなりに負担も大きい。

詳しくはどうでもいいが、それよりも……なぜ、こいつらがいるのだろうか。

魔法が使えるのはいい。どの世界でも使えた。しかし、こいつらがいる世界線は1つだけだ。俺がかつて妹と仲間たちを守るためだけに戦い、そして消滅した……あの世界だけ。

できうる限り早急に答えを見つけねばな。

「閃雷、現状の報告と所在地の情報を」

「ハッ。我々は閣下が現界してから現在まで監視を続け、先ほど戦闘となった謎の人物と遭遇。時刻は14時38分。次元軸はY10859 - NNSOW - K38NTです」

「……やはり、か。子供^{チルドレン}たちはそろったか」

「はい。3小隊全てそろいました。部隊長村雨・O・閃雷、閣下の下に召集完了しました」

「現時刻を持って緊急会議を行う。各小隊長を前に」

「ハッ。ここに」

森の中に閃雷を含めた9人の軍服を着た男女が集まり、その中から

2人が閃雷と並んだ。

2人とも成人とは呼べない歳だが……わけあって戦闘に参加させている。本来俺は未成年を戦いに巻き込まない主義なのだが、そうも言っていないことがあったとだけ言っておこう。

「各個、報告はあるか」

「いえ、H分隊はありません」

「右に同じく」

「N分隊より1つ。先ほど入手した極秘電文によると、時空管理局は我々OHNに宣戦布告を行う予兆があると」

「……本部の諜報課に任せておけ。現在から子供チルドレンたちは3小隊全てをある任務に就ける。O分隊は時空管理局にいる『高町なのは』・『空牙遊騎』・『八神はやて』・『大和和輝』・『有栖飛鳥』の5名の味方となりOHNからの特派員として指令下につけ」

「なにゆえ、敵対する可能性の陣営へ？」

「保険だ。我々OHNは敵対する気が無い、というフェイクでな」

「……了解しました」

「H分隊は『フェイト・T・ハラオウン』・『リインフォース』・『高町ヴィヴィオ』の3名を遠隔警護。決して姿を晒すな」

「ハッ。排除対象はいかように」

「危害をなすものだ。例えOHNの仲間であろうが、俺であろうが関係なく」

「そのように」

「最後にN分隊だが、しばらくは管理局に潜入してもらおう。潜入先は八神はやたと対象とし、奴が作るであろう部隊・組織・グループの全てに潜入しろ」

「了解です。緊急時の脱出はどうすれば」

「駆逐しろ　とは言わないが、できうる限りの機動力を削いで離脱しろ。致命傷を与える必要は無い」

「では増援などは望めますでしょうか」

「無理だ。これは俺たちとお前ら10人による少数精鋭での特務であり、相当閣下直轄部隊レジスタンスの関与も認められない。決戦でもない限り不可能だろう」

10人　　たったの、10人。

俺が今思案している作戦は、非情で卑劣なものだろう。

先ほどから……この世界に来たときから頭の中に流れ込んでくる情報レが本当だとすれば、こうしなくてはならなかった。

世界は俺を殺そうとし、守り手はいない……。

孤独な戦いになりそうだな、これは。

「我々は世界を敵に回す。管理局も、OHNも、あらゆる企業も、善悪問わずにだ。それを覚悟してくれ」

「覚悟の上で、今ここにいます、お父上」

「御身の下に、この命はあるのです」

「再びの忠誠をここに、お父様」

3人は頭をたれ、命を差し出してきた。いつだってこうだ。

俺がこいつらを受け入れたときも、戦いを忘れていた最中も、こうして戦争に介入したときも。

こいつらは……俺と共に生きてくれた。生きようとしていてくれる。

「……………これより極秘任務を開始する。お前たちにとってはこれが最初の特務であり、最後の戦争になるだろう。命を賭け、自由を捨て、己が心情を貫き、世界の糧とらんように生き抜け」

最初で最期、始まりで終わりとなる戦い。

世界は俺にこう言った。？狼と屍は手を取り合い、神率いる王たちとの耐えぬ争いは激化の一途を辿り続けん。統べる王、夜の王、空の王は従者を従え、三銃士は王の手足となる。世は毒に食われ、毒は全てを食らう闇夜となるだろう？ ……これが、俺に伝えられた世界の意思。

因果律の、触れ幅だ。

「矛盾こそがこの戦いの真価だ。矛盾によって純理を覆すことでこの戦いは終わらせられる。………やって、くれるか」

全員に語りかけ、3人の前に左手を差し出した。

俺が「命令だ」と言わぬ限り、こいつらは己の意思で動くことができる。

願いも、特務も、指令も、意志も。俺はこいつらに自由を願い続けた。

……だが、今は違う。

今俺は、こいつらに願いを託した。ただ普通の願い……頼みを。

「……………閣下　いえ、お父上、私は賛成です」

「僕もやる。父さんのお願いを断るなんて、できやしないしね」

「異議なし。断る理由もないし、パパの考えが間違ってるとも思わないしっ」

後ろにいた奴らが続々と前に出てくると、次々に俺に手を重ねてきた。

契りの合図だ。手を汚すという言葉があるように、それに同意・または賛同する場合にのみする行動。

最後には全員が集まり、手を重ねていた。

「この場に反対するものなどおりません、閣下」

「なんたって、俺たちの親父だからな」

「……愛し、尊敬するですから」

「相変わらずだねえ、兄貴たちも姉さんも」

長男の閃雷、次男の奇令^{キレイ}、長女のエイラ、三男のエヴィ。
子供たち^{チルドレン}の中で突出して能力の高い4人。
そして、俺が最も早く保護した4人だ。

「異存、ない。閣下を信じる」

「……ミイナが言うし、俺も信じてます」

「断る理由なんてないよん」

「僕も力になりたいから、やるよ」

「閣下は守ってくれたから……守りたい」

「言われなくてもねっ」

次女のミイナ、四男のアスト、三女のライカ、五男の怖宇摩^{フウマ}、六男
のリオ、四女の零亜^{レイア}。

最初の4人を助けた跡に担ぎ込まれた6人は、まだ未熟なところも

多いが一般兵のそれよりはるかに強い。
全員、俺が自慢できる子供たちだ。

「………すまない。今時をもって特務を決行する！ 各人任務へ
邁進まいしんしろ！」

「……………ハツ！！」「……………」

手を重ねていた子供チルドレンたちは一斉に消え失せ、一人残された俺は唐突に虚無感へ襲われた。

俺は今まで、そこそこの人数の子供を育ててきた。いや別に何度も結婚したりとかそういうのではなく、すべて孤児。つまり、身寄りの無い子供たちなわけだが。

初めて育てた………というより、無理やり引き取ったのは、俺と同じ「戦争目的で生み出された」奴だった。細胞をいじられ、DNAを改竄され、肉体強化を施され、ナノマシンを投入された忌み子。俺と似通った境遇に当時の俺は何を考えていたのか、俺のような思いはさせまいと必死に育てていた。

たった、9ヶ月間だけ。

金銭的に辛くなったから別れたわけではない。できることならば別れたくなかった。しかしそうせざるをえなかった。

何でもできる超人と思われる俺でも、抗えぬことがあった。

………それは、俺の寿命だ。

元々体のあちこちを改変されているのだ。普通の人間と同じ寿命を持つわけが無い。その身体能力ゆえに体への負担も尋常ではないのだ。甘く見積もっても、体の限界は通常の人間の半分。

良くて、約35年の命だ。

俺は子供ガキの頃から戦争に出ていたせいで、計算よりも早かった。僅か27歳で、俺はこの世界から旅立った。

その後も俺は様々な世界を渡り歩き、様々な人と出会い、心を持つことができた。そうして今……俺はこの世界に戻ってきてしまった。どれほどまでに焦がれたことか。どれほどまでに望まぬことだったか！

俺はこの世界には……ならない存在だ！俺が再びこの世界に来たということは、再びこの世界に危機が訪れようとしていることだ！止め処無く流れる血の惨劇が、またここで……ッ！

「2万8365名の戦死者を出した悲劇が、繰り返されるというのか……！？」

俺は死者たちの名をすべて覚えてる。

哀れみからではない。俺が救えなかった不満からだ。

俺は……全てを救済し、頂点に君臨すると決めたのだ……！

「誰か……教えてくれ。この世の全てを救うには、どうすればいい……！」

この数百年間、どれほど考えようと答えの出なかった問い。

誰に聞くこともしなかったが、それでもいいと考えていた。そうしなければならぬと考えていた。

頂点に立つものこそ、下々の盾とならなければ世界は崩落を始める。そうであるからこそ均衡を保ち、1人の支配者によって和平がもた

らされる。

ただしき政治、統治、再生、破壊。それぞれが平行線にあることで……平和は訪れるのではないだろうか。

「英雄王……騎士王……征服王よ……！　？王の名？を持ちし者たちよ、俺に……俺を導いてくれ……ッ」

世界各地の史跡に名を刻んだ王たち。偉大な夢とそれを成し遂げた意志。俺はそれらを知りたい。そして、あわよくば物にしたい。世界を我が手にし、円滑に進められる争い無き世界を見たい。俺が望み続けた平和は……どこにあるのだろう。

『……………ん。……………さん！』

「……………ノイズ……………自動周波数調整、オート・クリアランス雑音除去、ノイズ・キャンセリング誰だ、名を名乗れ」

『　銀狼さん！』

「……………トーマ？　どうした」

『どうしたじゃありませんよ！　急に気絶して変な装備を出したと思ったら、通信がつながらなくなってるし、今までどうしてたんですか！？』

「あ、ああ……………すまない。少々力の暴走がな。今、どこだ」

『Y - 108、X - 558です!』

「了解した。すぐに向かおう」

現座標は……Y - 933、X - 186か。かなり遠いな。魔法でも使うか。

すぐさま思考を切り替え、俺はトーマたちの待つ森の中へと消えた。

狼・第2章 チルドレン（後書き）

こんばんは、作者です。最近語尾に「ござる」を付けるのがマイブームです。

銀狼 「……いらん情報だな」

うるさいな、私だって公開するかどうか3日間悩んだよ。

銀狼 「馬鹿だろ」

トーマ 「馬鹿だ」

リリイ 《……（コク）》

ひでえ……全員に罵倒された……。

トーマ 「……とりあえず、早く進行してくれ」と

……はいよ。

えー、今回は牙編です。言ってみれば管理局サイドですね。なのはやらそこらへんががんばる話です。

さて、ここまで話したらあとはよろしくねえ3人も！

銀狼 「はあ……。今回は俺の出番は知らん。まだ描いていないらしい」

トーマ 「つてか、そろそろ銀狼さんのNew設定画がうんたらかんならとか」

リリイ 《……》

お願いだからリリイはなんかツツコんで…… 無言は怖い！

トーマ 「仕方ない仕方ない」

銀狼 「諦めろ」

……はい、ごめんなさい。

というわけで私は「パパ聞き」でも呼んでるから、次回予告どうぞ。

銀狼 「……殺す」

トーマ 「デイバイダー……セットアップ」

銀狼 「いくぞ、トーマ」

え……ちよ、まっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2087x/>

魔法戦記リリカルなのはForce～世戦の軌跡～

2011年12月11日19時53分発行